探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：三原市立第二中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
三原市立第二中学校	13	371
三原市立三原小学校	21	477
三原市立中之町小学校	18	301
三原市立深小学校	4	21
三原市立鷺浦小学校	3	13

（R5.12.1現在で記入）

１　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

児童生徒が主体的に探究し、資質・能力を高め合う学びの創造
～生活科・総合的な学習の時間における
プロジェクト型学習の考えを基にして～

生活科・総合的な学習の時間におけるプロジェクト型学習の実践を通して、主体的な探究を実現し、各校で設定した資質・能力を効果的に育成することをねらった。

（２）資質・能力の設定について

二中校区で統一して育成を目指す資質・能力として「主体性」を設定した。三原市教育基本理念に照らし、二中校区での「主体性」を認識、思考、行動の３要素で整理した。「主体性」に加えて、各校で児童・生徒の実態に応じた資質・能力を設定した。

（３）取組について

【二中校区版プロジェクト型学習】

事業初年度に「三原だるまプラン～ちょっと好きからのもっと好き～」を構築し、３年間全校で取り組んだ。図１が三原だるまプランの大まかな単元構成と児童生徒の主体性を育成するための２つのポイント（①みんなで考えた「ルーブリック評価」②ショックから思いを引き出す「探究課題の更新」）を示したものである。地域の人・もの・ことと関わる探究を仕組むことで、地域や題材に対する「好き」の気持ちを育むことを目指した。

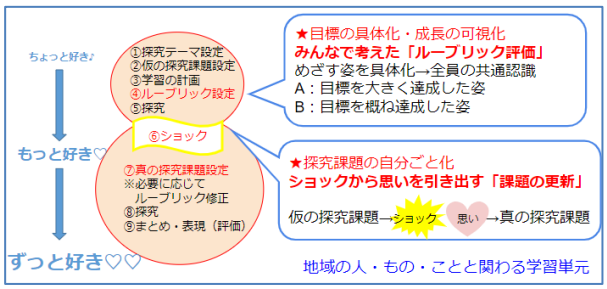

図１　「三原だるまプラン」の単元構成と２つのポイント

これまでの実践を整理して、だるまプランの単元構成を、図２の通り「ショック一発型」「ショック多発型」「ショックいきなり型」「ショックいきなり多発型」の４つの型に整理した。児童生徒の興味や関心、教師の意図、題材の特性や地域の実態等を汲み取って、最も適した型で単元を構成し、児童生徒の思いを中心に据えて、柔軟な単元構成を心がけた。

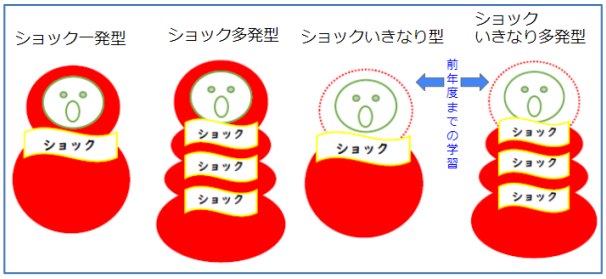

図２　三原だるまプランの型

また、これまでの実践から、ショックのタイプも次の３つに整理した。単元の特性や現状、児童生徒の実態をとらえ、単元の中に位置付けたが、予期せぬショック等、計画通りにならないこともあり、単元計画を緩やかに変更・修正しながら学習を進めた。

①　未知の事実との出合い「どっきりタイプ」
②　予想と現実のずれへの気づき「びっくりタイプ」
③　予想通りだけど残念「がっかりタイプ」

【これまでの取組をふまえた今年度の重点ポイント】

３年間継続して取り組んできた二中校区アンケートの結果を分析すると、各校の実態はそれぞれ異なるが、全校に共通している課題が大きく２点あることが分かった。１点目は、探究課題や題材に対する思いおよび資質・能力の育成に個人差があること、２点目は、自分の成長に自信をもつことができない、つまり、教師の見取りと自己評価の結果に乖離がある児童生徒がいることである。この課題を解決するために、今年度は３つの重点ポイントを意識して取組を行った。

①　課題設定の工夫
児童生徒に最後まで主体的に探究させることを目的に、自己決定をして課題を設定できるよう、課題設定に関わる選択肢を複数用意した。また、まとめ・表現の過程では、誰のために行うのか、何のために行うのか、といった相手意識と目的意識を明確に持たせて課題を設定し、活動を行った。

②　学び合いの重視
意見を関わり合わせながら探究の価値を高め、児童生徒の主体性を引き出していくために、学び合いを重視して授業を展開することにした。児童生徒には「～さんの考えに似ていて…」「～くんの考えとは少し違うけど…」といったつなぎ発言を指導し、教師自身は、児童生徒の学びをファシリテートできる切り返し発問や構造的な板書の在り方を検討し、実践につなげていった。

③　評価の方法や時期・内容の工夫
児童生徒に自分自身の成長を自覚させ、自信をもたせることを目指し、子どもルーブリックの設定と共有、評価の方法・内容の工夫を重点的に行うことにした。年度初めに子どもルーブリックを設定し、児童生徒の成長や単元の進捗に合わせて修正する機会を設けた。評価を行う際は、視点を明確にし、自己評価や相互評価など多様な評価方法を取り入れた。また、評価の時期を工夫し、成長の実感が持てたタイミングで評価を行うことを心がけた。

２　実践事例

上記の重点ポイントを意識し、効果的だった実践例を挙げる。

①　課題設定の工夫
三原小学校第２学年・生活科「もっとなかよしまちたんけん」

では、よさを知りたい探検先を選択させて町探検を行った。

第二中学校第２学年・総合的な学習の時間「未来の自分に近づこう！」では、複数の地元企業の中から、興味がある職種や自分の夢にかかわりのある企業を選んでインタビュー等を行った。自己決定をして学習を進めることで主体性を引き出すことができた。

写真１・２　自己決定をして学習を進める児童生徒

②　学び合いの重視

学び合いを通して探究の質を高めていけるように、児童生徒のつなぎ発言と教師のファシリテーションを重視して、授業を展開した。発達段階に応じて、指導内容に多少違いはあるが、友達の意見が自分の意見と似ているか違うか、といった視点を持って話をよく聞くようになったり、似ている意見から順に整理することで思考の整理がしやすくなったりするといった利点があった。

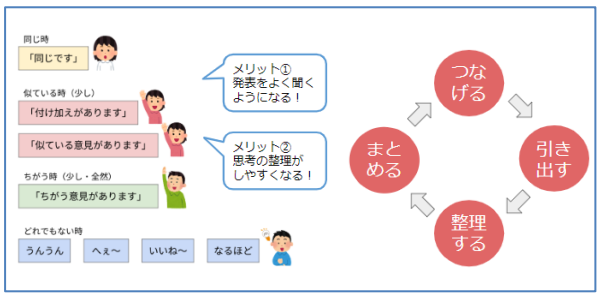

図３　つなぎ発言とファシリテーションの研修資料

③　評価の方法や時期・内容の工夫

昨年度より、検討を重ねて評価の工夫を取り入れてきたが、児童生徒の自己評価や教師の見取りに偏ってしまうという実態があった。相互評価や外部評価を取り入れて、評価に客観性をもたせることができるように取り組んだ。

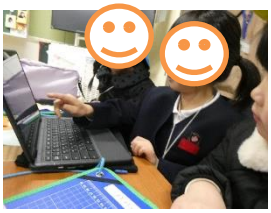
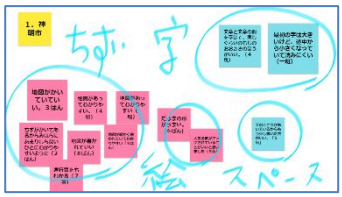

写真３・年長児にインタビューをして外部評価をする１年生児童
写真４・互いの成果物を評価し合った３年生児童のジャムボード

また、小学校高学年や中学校を中心に、ICT機器を活用して互いの意見が見えるように振り返りや自己評価を行うことで、次時への見通しが持てたり、相互評価につなげたりすることができた。成果物等はお世話になった地域の方に内容を確認したり、完成品をお持ちしたりすることで、温かいメッセージをいただくこともでき、児童生徒の自己肯定感の高まりにつながった。

３　研究の成果と課題等

（１）成果

１年間の取組を通して、４・５月と12月に行ったアンケートの結果に変容があった。小学校６年生と中学校３年生の例を示す。

質問項目	第二中	三原小	中之町小	深小	鷺浦小
認識	+13.3	+3.5	−0.5	−16.6	±0
思考・行動	+7.3	+2.5	−5.2	±0	±0
行動	+2.2	−0.2	+1.6	−8.3	±0
探究	+6.8	+4.7	+5.9	+8.3	+100
地域	+10.5	−2.6	−7.9	−8.3	±0

表１　小６・中３の肯定的評価の割合の変容（４・５月→12月）
※鷺浦小の６年生児童は１名

アンケートの実施時期が影響し、数値が下がった項目もあったが、全体的には向上し、教師の見取りでも行動に変化が表れた児童生徒が増加した。また、ノートやOPPA等に「話を聞いているときに、質問や思ったことがたくさんあったから（探究力がのびた）」（３年児童）、「グループで活動するときに自分の意見をまず出して、そこからみんなで必要な意見といらない意見を分けられたので協働性がのびました」（４年児童）、「前までは、相手の分かりやすいように表現できなかったけど、今回は相手の納得するような表現ができたと思う」（５年児童）といった表現が見られ、アンケートでの自己評価のみならず、記述の面でも資質・能力の成長を自覚する児童が増加したことが窺えた。

（２）課題

校区全体における課題は、大きく２点ある。

１点目は、個に応じたきめ細やかな指導や支援の在り方の検討である。２点目は、今後も取組を継続・発展させていくための組織づくりである。一人一人の興味関心に寄り添った授業を展開していくために組織的・計画的に取組を行っていく下準備が必要である。

（３）今後の改善方策等

事業終了後も取組を継続し、探究の質を高めていくために、取組のブラッシュアップを図りながら、内容を精選して計画をスリム化していく必要がある。全校で以下の３点に取り組み、来年度以降につなげていく。

１点目は、各校で育成を図る資質・能力の整理である。年間を通して、知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度の３本柱から成る10項目に関わる指導をし、評価をしていくために、各校で育成を図る資質・能力を整理していく。

２点目は、人材バンクの作成を通した地域連携の継続である。地域の方とつながり、学習を充実させていくための工夫をする。

３点目は、生活・総合のカレンダーの作成を通した次年度への引き継ぎと次学年への申し送りである。子どもたちが前年度までにどんな経験をし、どんなことを学んできたのかを校内、校区内でしっかりと連携し、次年度に引き継いでいく。

【主要参考文献】
・堀　公俊（2004）「ファシリテーション入門」日経文庫
・石川一喜・小貫仁（2015）「教育ファシリテーターになろう！」弘文堂